

プログラム

エルガー
愛の挨拶 作品12 (三重奏 2' 30")

モノー
愛の讃歌 (チェロ&ピアノ 3' 00")

クライスラー
愛の喜び (ヴァイオリン&ピアノ 3' 30")

リスト
愛の夢 (ピアノ 5' 00")

シューベルト
アヴェ・マリア (三重奏 4' 30")

ブラームス
ハンガリー舞曲第6番 (三重奏 3' 30")

～休憩～

ブラームス
ピアノ三重奏曲第1番 口長調 作品8 (三重奏 35' 30")
※楽章間の拍手はお控えください

曲目解説

文：下田 幸二(音楽評論家・ピアニスト)

エルガー
(1857～1934) 愛の挨拶 作品12

1888年、エルガーはキャロライン・アリス・ロバーツとの婚約記念にこの作品を贈りました。アリスはもともとエルガーのピアノの生徒でしたがエルガーより9歳年長で、1889年に結婚したのちは、不遇な時代のエルガーを物心両面から支えました。優雅な旋律がヴァイオリンとチェロとピアノでやりとりされます。アリスとエドワードの愛の言葉はどこまでも温かです。

モノー
(1903～1961) 愛の讃歌

シャンソンの女王エディット・ピアフの大ヒット曲です。「青空が落ちてきても、大地が崩れさっても、私はかまわない、あなたが愛してくれるなら。世界がどうなったっていいの」と謳い上げます。マルグリット・モノーはシューマンの歌曲「春の夜」(リーダークライス第12曲)にインスピレーションを受けてこの作品を作曲しました。

クライスラー
(1875～1962) 愛の喜び

ユダヤ系オーストリア人として生まれたフリッツ・クライスラーは、ウィーンとパリで学んだヴァイオリンの巨匠でした。第二次大戦前までは主にヨーロッパで活躍し、戦後は完全にアメリカに移住しました。《愛の喜び》は、重音でヴァイオリンが躍り出ます。間にたいへん優美な二つのワルツを挟みながら、愛の喜びはどこまで高まります。クライスラーの《ウィーン古典舞曲集》で最も閑達な作品で、《愛の悲しみ》と共に、クライスラーの最も愛されている小品です。

リスト
(1811～1886) 愛の夢

《愛の夢》といえはこの作品を指すくらいポピュラーですが、実際には《愛の夢－3つのノクターン》の第3番変イ長調のことです。元はフライリヒार्टの詩、「愛せよ、愛しうる限り！」に作曲した歌曲で、それを1850年頃にピアノ独奏用に編曲し、他の2曲と共に出版したのです。ロマンティックな旋律が優雅なアルペッジョにのって歌われ、華麗なクライマックスを描きます。リストの弟子ゲレリヒによれば、1884年6月20日にリストがグライペル夫人にしたレッスンでは、「冒頭フレーズは、重苦しくならず淡々と。愛しうる限り、といっても愛とはそう長続きしないものだから」と語ったといいます。稀代のもて男リストらしいエピソードです。

シューベルト
(1797～1828) アヴェ・マリア

スコットランドの詩人ウォルター・スコットの叙事詩『湖上の美人』はアダム・シュトルクにより独語訳され、シューベルトはそれを《歌曲集『湖上の美人』》として7曲の独唱・重唱・合唱曲集にしました。この美しき第6曲は、「アヴェ・マリア」で始まり、聖母マリアへの祈りを歌います。叙事詩の主人公の名から「エレンの歌Ⅲ」とも呼ばれます。

ブラームス
(1833～1897) ハンガリー舞曲第6番

ブラームスはハンガリー出身のヴァイオリニストのレメーニとの共演でジプシー音楽に触れたことをきっかけに、21曲の連弾曲集である《ハンガリー舞曲集》を生み出しました。中でも1869年に出版された第6番はたいへん人気があり、ヴェルブンコシュ＝「募兵の踊り」由来のチャルダッシュ(酒場風)の様式をかりて、明るいつつたりした「ハルガトー」と急速な「フリッシュ」が繰り返されます。本日はルイス・リースによるピアノ三重奏版でお届けしま

～休憩～

ブラームス
(1833～1897) ピアノ三重奏曲第1番 口長調 作品8

椿三重奏団のデビュー・アルバムにも収録されている本作は、たいへん深みがありながら、心地よい爽やかさも感じさせるピアノ三重奏曲の傑作です。これだけの傑作ですから壮年期の作かと思いきや、作曲を始めたのは1853年夏、ブラームス二十歳のときで、翌年1月に完成されました。それは若々しい感覚だったのです。しかし、作品の出来に満足していなかったブラームスは、1889～90年、実に56歳になってから大改訂をします。改訂版では、若さゆえの感覚的な対位法的部分が和声的に熟練され、いささか冗長であった部分が新たな曲想に置き換えられて、構成も引き締まりました。現在弾かれているのはこの改訂版です。

- - - - -

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ

温かい響きのピアノから第1主題が始まります。それに最初に深く呼応するのはチェロです。そこへ、さっと麗しきヴァイオリンが加わってきます。この部分だけでこの作品がいかに魅力的かわかるのですが、その後の嬰ト短調の憂いを含んだ第2主題、ブラームスらしい厚みのある響きでの展開部など、まったく素晴らしいソナタ形式の楽章です。

第2楽章 “スケルツォ” アレグロ・モルト

口短調にかわり、謎めいたスケルツォになります。スリリングなやりとりが3つの楽器でなされると、一転して主調による大河のような中間部が朗々と詠われます。

第3楽章 アダージョ

この楽章は、ブラームスが敬愛したクララ・シューマンの「クララの下行動機」(《ワルツ形式によるカプリス作品2-7》の中間部)を想起させる主題で始まります。そしてその想いは口短調に変わる中間部でさらに増すのです。

第4楽章 アレグロ

調性不安定な口短調で始まる Rond です。続くニ長調のダイナミックなエピソード、展開的で慟哭する第2のエピソードとの対比が見事です。実にブラームス的に玄妙でラプソディックなフィナーレであり、最後は口短調のまま最高潮の中で劇的に終わるのです。